

## 世界の話題

### ドイツ

高齢になり介護が必要になったとき、自宅で介護を受けるか、施設に入るかで悩む人はドイツでも多い。選択肢の一つとして、高齢者向けのシェアハウスの人気が高まっている。

シェアハウスは一つの家に複数の人が家族以外と住み、キッチンや居間などを共有して使う形態。ドイツの高齢者向けシェアハウスは、入居者の家族が家を借りて独自の運営をするケースが多い。各自が自分の個室を持ち、できる範囲で本人たちが身の回りのことをするなど自主性を尊重している。

入居者が自分で身の回りのことをするとしても、生活を見守り、介護をする人は不可欠。不動産を探してシェアハウス用に改装することも必要だ。このため、ハウスの開設、運営を専門の団体に任せるのが一般的だ。そのうえで介護サービスの内容などを家族や入居者が団体側と話し合っている。

ミュンヘンにある認知症の高齢

### 高齢者介護に シェアハウス



者が入居するシェアハウスの関係者は「一番気を使い、費用もかかったのが防災面だった」と話す。改装費は寄付金でまかない、火災の際は火災探知機が消防署に自動的に連絡し、非常階段の鍵を開ける仕組みを取り入れている。

現在、ドイツの80歳以上の人口は約350万人。あと40年で3倍になるといわれている。ドイツの連邦政府は全国に約1500あるシェアハウスをもっと増やそうと、開設や運営に助成金を出すことを検討している。 (福田 直子)